卒業生へのメッセージ

３月を迎え、ようやく日差しに温もりが感じられる穏やかな気候となりました。
本日ここに、長野県南信工科短期大学校は卒業式を挙行し、専門課程の機械システム学科１８名と電気システム学科１０名に卒業証書を授与いたしました。
加えて、短期課程機械科の修了式では、９名に修了証書を授与いたしました。

卒業生・修了生の皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。
卒業される皆さんの晴れやかな門出を祝うとともに、これまで温かく見守り、支えてこられましたご家族の皆様に心よりお慶びを申し上げます。
さらに、来賓の皆様におかれましてはご多用中のところご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。
さて、本校は、平成２８年４月に、南信地域の皆様の大きな期待と厚いご支援をいただき、地域のものづくり産業を支える高度な技術者を育成する、長野県立の高等教育機関として設置されました。本年度、私たちは、開校１０年目という大きな節目を迎えています。
本校設置の主たる目的は、将来の「ものづくり産業」を担う「地域中核人材」の育成です。この１０年間、本校は地域の期待を背負い、急速に進展する技術革新（イノベーション）にも柔軟に対応できるＤＸ時代の実践技術者「デジタル・エンジニア」を育ててきました。
すなわち、専門知識と技術・技能を兼ね備え、将来の地域のリーダーとして積極的に活躍する「ものづくりのスペシャリスト」を育成しています。

本校の歴史の記念すべき節目に、本校を卒業・修了される皆さんに、教職員を代表して餞の言葉を述べさせていただきます。
最初に、専門課程を卒業する皆さん。
皆さんが、本校で過ごされた２年間は、決して楽しいことばかりではなかったかもしれません。複雑な数値制御工作機械の操作、ＣＡＤやＣＡＭによる設計、難解な言語によるプログラムの作成とそれを動かす電気回路の設計試作など、大変、ご苦労されたことと思います。
そんな中、皆さんは、１年の後期からの「総合課題」では、学科の垣根を超えてグループを組み、アイデアを出し合い、自ら設定したテーマに、一丸となって取組みました。
そして、２年次になってからは、２年間の集大成として、ひとり一人が自ら見出した課題に対して、その背景の探索、目的の設定、実験や測定方法等の研究計画の決定、実

験の実施、得られた結果の解析と結論の整理、そして改善策と展望を、卒業論文としてまとめ上げました。

苦しい中にも楽しい学生生活の１コマとして思い出に残こしていただけえることを願っています。

本校での学びの経験は、間違いなく皆さんが未来に向かう上で、大きな財産になります。これからは、地域の中核となって積極的に社会を牽引していただくことを、強く期待しています。

次に、短期課程を修了する皆さん。

皆さんは機械科で、伝統的な金属加工器具から最新のデジタル機器を操作する、知識と技能を習得し、即戦力の「ものづくりのスペシャリスト」としての、さらなるスキルアップを目指しました。

皆さんは、半年間という短い期間で、「普通学科」、「基礎学科」と「専攻学科」の、座学の授業で得た機械工学の知識と、「基礎実技」および「専攻実技」の実習授業で、高度な技術と技能を身につけて修了されました。

出向元の企業に戻られる方、新たな道へ進まれる方、それぞれですが、この半年間のハードな授業で得た知識と技能を修得したことが、皆さんのこれからの将来を支える大きな力となることは間違いありません。

ご活躍を心より祈念しています。

さて、現在のようなイノベーション（技術革新）の激しい時代では、専門的な基礎知識と先端技術の知識だけでなく、実践的な技術・技能を兼ね備えた、第一線で活躍できる人材が明日の「ものづくり」にぜひとも必要です。

そのような人材の育成のために理念と目標に基づいて構成された本校のカリキュラムを卒業・修了された皆さんには、自信を持って、これから待ち受けている様々な課題に積極的に挑戦してください。本校で培った知識と技術・技能にさらに磨きをかけ、自らの未来を切り開いて行かれることを願っています。

長い人生では、幾度となく、技術者としての判断に迷うことが必ず訪れます。そんな時には、「何のために、誰のために、知識と技術・技能を使おうとしているのか」、を自らに問い掛けてください。それこそが、技術者として、一番大切なことではないでしょうか。

また、専門課程、短期課程の長短はありますが、同じ学校で学習した仲間との絆は大きな財産です。今後も切磋琢磨しあい、時には親交を深め、一生の宝物として大切にしていっていただくようお願いいたします。

最後に、南信工科短期大学校から巣立ちゆく卒業生・修了生の皆さんの輝かしい未来を、心から願い、私からのメッセージといたします。

令和８年３月１１日　長野県南信工科短期大学校長　**武田 三男**